

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. **16**

2021.7

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.



CONTENTS

特集
01 **地域×高校**

地域創生と高校の魅力化

地域が動く・プロジェクト最前線

- 07 **地域×ICT**（旭川市）
ICTパークを活用した中心市街地の
にぎわいづくりとICT人材の育成
- 09 **地域×企業**（喜茂別町・長沼町）
各地で活躍する地域活性化起業人

特集

地域×高校

地域創生と高校の魅力化

地域創生に向けた
高校の魅力化とは

いま各地域で地域創生の取組が進められている中、高校が果たす役割には大きな期待が寄せられており、第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の施策の一つにも「高校の機能強化等」が掲げられています。

北海道が将来にわたって輝き続けていくためには、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念の下、学校と地域の連携を深め、情報を共有するとともに、協働して地域の人材を育成することが重要です。そのためには地域創生の観点からも、地域ぐるみで生徒から選ばれる魅力ある高校づくりを推進する必要があります。

北海道教育委員会では、この取組を推進するため、『地域創生に向けた高校魅力化の手引』と『高校と地域の連携・協働を進めるために』を令和2年12月に作成しました。

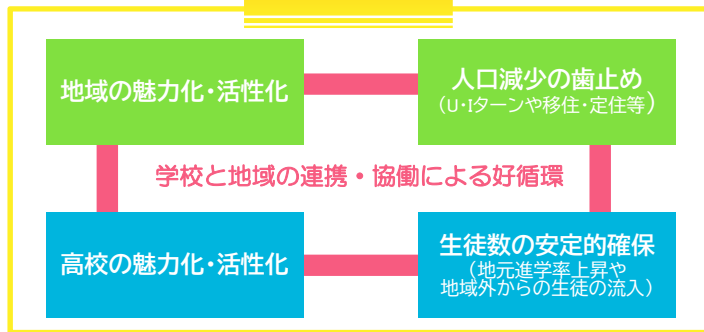
学校と地域の連携と
地域創生

これからの社会を生きる子どもたちには、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら未来を作り出し、課題を解決する資質・能力を身につけることが求められています。このような資質・能力は学校だけではくまれるものではなく、家庭における教育はもちろんのこと、地域とのつながりや多様な人々との関わりの中ではなくまれるものです。

学校と地域が、地域にある高校をより魅力あるものにしていくと連携することとは、子どもたちの将来のために豊かな学びと成長の場を保障するだけでなく、人材育成やUターン・Iターン等による人口減少の歯止めとなる役割を果たします。さらにその取組は、地域の将来の担い手となる若い人材を育て、地域社会全体の活性化や魅力の向上につながっていきます。

このように、学校と地域の連携・協働は持続可能な地域を実現するための好循環を生み出します。

持続可能な地域の実現



手引で考える
高校の魅力化について

高校の魅力を高める「魅力化」については、様々な捉え方があると考えられますが、生徒にとつて魅力的であることが大前提です。こうしたことを踏まえ、手引では「高校の魅力化」を下の図のとおり示しました。また、魅力化

「高校の魅力化」とは？

生徒や学校、地域の実態を踏まえ、地域と連携・協働して社会の変化や生徒の多様な学習ニーズに対応した教育活動を展開し、生徒の自己実現に寄与することができる高校づくりを推進することにより、生徒から選ばれる学校になること

生徒・保護者にとっての魅力化
どの地域においても、大学進学や就職など多様な進路希望を実現でき、保護者も安心して進学させることができる高等学校になること

地域にとっての魅力化
地域と高等学校が相互に連携・協働しながら地域づくりのパートナーとして位置付けられるようになること

には、様々な人が関わることから、生徒や保護者にとつての魅力化と、地域にとつての魅力化という2つの側面から整理しています。

手引のダウンロード



QRコードからダウンロードできます

参考資料

推進体制の構築例、具体的な取組事例など参考資料を掲載。

第2部 実践編

どのよう魅力化を進めていくか、推進体制の構築や具体的な取組内容、取組の方向性を提示。

第1部 解説編

作成趣旨や構成、高校の魅力化を進める上での考え方を説明。

地域とともにある
高校づくり

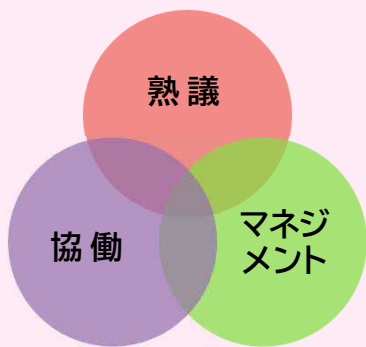
社会総掛かりでの教育を実現する上で、学校は地域社会の中でその役割を果たし、地域とともに発展していく必要があります。そのため地域でどのような子どもたちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」の運営をめざします。

運営にあたっては備えるべき機能として「熟議・協働・マネジメント」の3つがあり、これからの学校運営に欠かせない機能として再認識することが必要です。

推進体制の構築

学校と地域が連携・協働するためには、推進体制の構築が必要です。その一つに「コミュニティ・スクール」があります。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置する学校のことであり、「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みです。

「コミュニティ・スクール」では、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができます。高等学校は、義務教育諸学校とは異なり、生徒の選択により入学する学校であるため、通学区



熟議

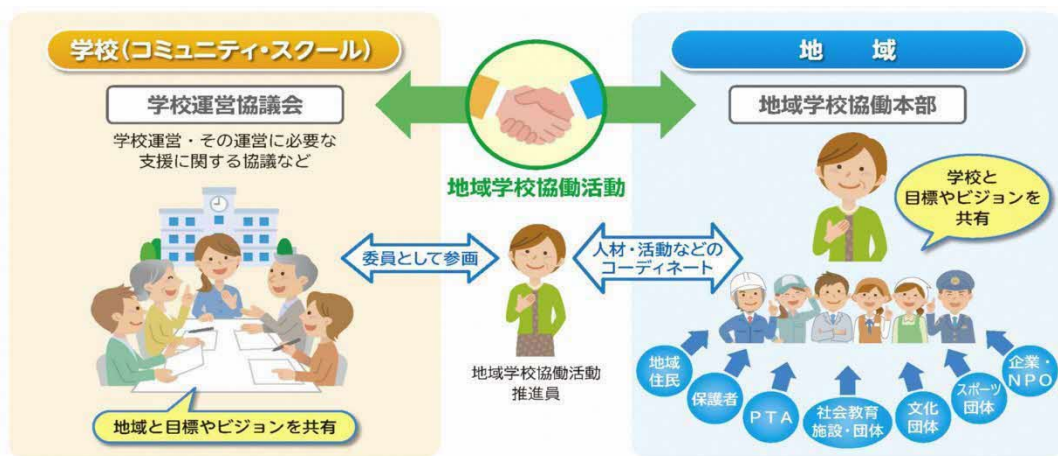
全ての関係者が当事者意識を持ち、子どもたちが抱える課題等の実態を共有するとともに、地域でどのような子どもたちを育てていくのか、何を実現していくのかという目標・ビジョンを共有するために「熟議（熟慮と議論）」を重ねること

協働

学校と地域の信頼関係を構築した上で、学校運営に地域の人々が「参画」し、共有した目標に向かって共に「協働」して活動していくこと

マネジメント

その中核となる学校は、校長のリーダーシップの下、教職員全体がチームとして力を発揮できるよう、組織としての「マネジメント」力を強化すること



コミュニティ・スクールと地域のかかわり

が広範囲にわたることに留意する必要があります。

しかしながら、広く地域や社会の参画・協力を促進することは、学校運営の改善につながり、キャリア教育の推進や学校の魅力化に資するもので、学校運営協議会の設置は有効です。

具体的な取組に向けて

魅力化に向けて具体的な取組を検討するにあたり、各学校は現状や課題、地域の要望などを把握し、方策を考えていく必要があります。

検討にあたっては、各種調査結果等のデータに基づき、生徒の姿や学校及び地域の現状を把握するとともに、前述のコミュニティ・スクールや連携する組織などを活用し、保護者や地域住民からの要望や意向を的確に把握することが重要です。

把握した内容をもとに、子どもたちの将来の夢や希望を実現できる環境を保障する取組や、地域を学びの場とした取組を検討します。地域と深くかわる取組を通じて、子どもたちに地域への愛着や誇りをはぐくむことが、現在の地域の価値の再発見や将来を担う世代の蓄えとなり、魅力ある地域を生み出すことにつながります。

次ページからは、地域を学びの場とした教育活動を推進する道内市町村の取組事例を紹介します。

地域を学びの場とした取組

地域を学びの場とした教育活動を推進することは、生徒が他者と協働しながら課題を解決し、未来をつくりだす資質・能力を育成するために大変効果的です。また、地域創生の観点からは、取組を通じて、子どもたちに地域への愛着や誇りを育むことが大切であり、地域の担い手となる人材を育成できるだけでなく、安心して子どもたちを育てられる環境により地域としての魅力を生み出す効果が期待できます。

地域を学びの場とした教育活動の取組には、次のようなものがあります。

- ### 地域を学びの場とした教育活動
1. 地域課題探究型の学習活動
 2. 地域の企業等と連携したキャリア教育
 3. 地域の人材等の活用や異年齢集団での活動
 4. 地域の特性や学びの場の確保
 5. 道外からの入学者や地域留学の受け入れ



ローカルダイアログによるワークショップの様子

地域課題探究型の学習活動 「まちづくりワークショップ」 (岩内町の例)

岩内町では、次期町総合計画大綱の策定に向け、地元の高校生の意見を反映させるため、ローカルダイアログによるワークショップ(自分たちが住みたい町の姿を考え、カードを使って対話しながらまちづくりの戦略をつくりていくワークショップ)を実施しています。岩内町職員2名と岩内高校2年生8名程度がグループを編成して協議を行い、「子どもから高齢者まで豊かな生活を送るためには、定期的に高齢者と触れ合う機会をつくるのが大切」などの意見が出されました。

地域の特性や学びの場の確保 「遊覧船観光ガイド」 (虻田高校の例)

虻田高校では、学校設定科目「地域ビジネス」において、高校生による洞爺湖遊覧船観光ガイド育成プロジェクトを実施しています。3年生は、洞爺湖町に関する地理や観光などの地域資源について様々なことを学び、その知識を生かした観光ガイドプランを考え、



介護老人福祉施設の入居者を対象としたガイド研修の様子

秋には、遊覧船で実際にガイドを行っている様子。

地域の特性や学びの場の確保 「避難所運営ゲームの製作」 (標津高校の例)

標津高校では、生徒会が中心となり、標津町危機管理室の協力を得ながら、災害時の避難所運営を模擬体験できるゲーム「HUG(ハグ)」の標津町版を製作し、町民の防災意識を高める取組を行っています。

標津町版オリジナルHUGは、地域のハザードマップを参考にカードを作成しており、ヒグマの足跡、外気温の変化や感染症等をカードに盛り込むほか、短時間で終了できるよう工夫がされています。



標津町版オリジナルHUGで使用するカード。住民・イベント・情報提供の3種類で構成されている。

遊覧船観光ガイドの研修内容

研修(洞爺湖周辺ガイド研修)

講義(洞爺湖の自然・イベント、ガイド術等)

有珠山ロープウェイ研修

観光ガイドプランの立案など

模擬ガイド(同校2年生、地元中学3年生)

ガイド研修(道外高校生、地域住民)

【HUG(ハグ)とは?】

避難所運営を皆で考えるための一つのアプローチとして静岡県が開発したもの。避難所の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所となる体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲーム。

地域学の取組

地域創生やSDGsの観点からの探究活動の例

- 高等学校・地方自治体・大学の三者の協定締結による高校生が主体的に地域課題を考える取組
- ソーシャルビジネスの手法により地域の課題を解決する取組（SBP）
- 中学生・高校生が連携し、市町村の魅力について市町村部局に提案する「子ども議会」の取組
- 総合的な探究の時間や特別活動を活用し、地域課題をテーマとした探究的な学び
- 市町村と連携した「タウンミーティング」の実施
- 振興局と連携した地域振興策の企画・提言
- 「地域学」等の学校設定科目の開設

地域課題等を発見し、解決する地域課題探究型の学習活動の中には、地域創生やSDGsの観点から取組を行っている学校があります。

高校では、国語や数学などの学習指導要領で示された教科・科目のほかに、特色ある教育課程を編成するため、学校独自に学校設定科目を設けることができます。その中で地域のことを学習する学校設定科目「地域学」は、地域課題を解決しようとする態度や社会の形成者として必要な資質・能力を高くおくことができるため、持続可能な地域づくりにとっても重要です。

学校設定科目「つべつ学」 (津別高校の例)

(津別高校の例)

津別高校では、1～3年生までの授業として地域全体を学びの場とする学校設定科目「つべつ学」を開設し、地域の人材や教育資源を活用した教育活動を展開しています。

【目標】

地域全体を学びの場として、地域の教育資源を活用した探究的な学びを実施し、基礎的な課題発見・課題解決能力を身に付けるとともに、グローバル社会において地域社会に貢献する態度を育成します。

つべつ学Ⅰの学習計画（1年生）

オリエンテーション
(ねらいや探究活動の手法等の説明)

津別の自然
(津別の気候・地形・動植物、観光スポット等)

津別の農業
(津別の農業の特色、津別産原材料の特産品)

北大との高大連携事業
(未来ワーク、北大での特産品販売)

津別の畜産・酪農業
(酪農と畜産の違い、津別の畜産・酪農業)

報告会等
(学習成果の報告、津別町への課題解決策の提言)



唐辛子の栽培体験



農業体験で説明を受ける生徒

【内容】津別町の自治体や企業、NPO法人、教育機関などと協働して、津別町の自然、農業、酪農業、畜産業を学ぶほか、生徒が地域社会の一員であるとの意識を持ちながら地域課題の解決に向けて、課題研究に取り組みます。

学校設定科目「上士幌学」（上士幌高校の例）

【対象学年】3年生

【目標】自分の暮らす地域について学ぶことで、地域を理解し、地域を大切に、将来にわたって地域社会に貢献し、持続可能な開発を担っていこうとする態度を育成します。

【内容】

- 北海道にある十勝、上士幌町の歴史・地理の学習
- 北十勝の自然に触れ、自然環境について学び、どのように十勝の自然を守っていくか考える力を養成
- 地域の食材について学ぶことで、地域の食材について理解と関心を深め、食材を生かした特産品の開発と販売について体験
- 地域産業について学び、仕事での心構えを学習

学校設定科目「松前学Ⅰ」（松前高校の例）

【対象学年】1年生

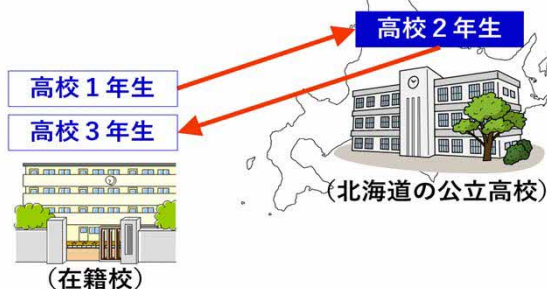
【目標】松前の歴史、文化、産業、自然等を学んでいく中で、松前を知り、松前を愛する心を育てるとともに、単なる知識（基礎力）だけではなく、自ら主体的に学ぶ行動力と探究力を育成します。

【内容】

- 松前の歴史、文化、産業、自然等の学習
3年間の松前学の導入として、松前に関する基礎的な知識を身に付ける学習。史跡巡検や郷土芸能体験を通じて理解を深めます。
- テーマ別研究及び発表
個人又はグループでテーマ設定。校内・地域へ発表。
(例) 松前藩主の研究、郷土菓子の歴史、蠣崎波郷と夷酋列像

地域留学

高校生が、在籍する高等学校とは別の高等学校において1学年を過ごすこと



北海道教育委員会では、将来的な関係人口の創出・拡大をめざして、内閣府の「高校生の地域留学推進のための高校魅力化支援事業」を活用し、「地域留学」を実施しています。

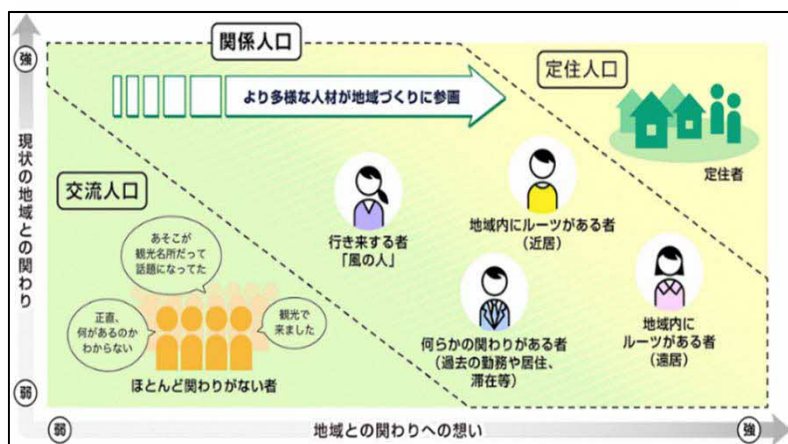
持続可能な地域づくりを進めるためには、それぞれの地域に活力を取り戻すことが大切です。そのため、特定の地域に継続的に多様な形で関わる「関係人口」の創出・拡大が注目されています。地域にとっては、地域外の人間が「関係人口」として関わることに

地域留学とは
〜関係人口の創出〜

地域留学の取組

より、地域の魅力を再発見する機会を得ることができ、地域活性化や将来的な移住者の拡大等に寄与することが期待されます。

今年度、第一期生となる24名の地域留学生在が全国各地で地域留学を開始しています。道内では、鶴川高校、斜里高校、幌加内高校の3校がそれぞれの学校で1年間を過ごす7名の地域留學生を受け入れています。



関係人口が地域へもたらす影響

品 鶴川高校（むかわ町）
地域をキャンパスとする「むかわ学」。特性を伸ばす少人数学習で、これからの社会で求められる想像力を育てる。

「むかわ竜」「ししやも」とユニークな地域資源のある地域全体をキャンパスととらえ、これからの社会に対応した新しい価値を創造できる力をはぐくみます。学びの特徴としては、地域資源を題材に地域振興の観点から地域社会に貢献する態度や課題を解決する能力などを身に付ける「むかわ学」（地域課題探究学習）、生徒の特性や能力に応じたテーマを設定した少人数・習熟度別のグループでそれぞれの特性や能力を伸長させる「チャレンジ・スタディ」（テーマ別学習）が挙げられます。日本の恐竜研究の第一人者である北海道大学の小林快次教授をオブザーバーとした、化石の発掘体験といった恐竜研究や、北見工業大学、桐生大学短期大学部、北海道大学総合博物館などとの大学連携も強化しています。



町の中心を流れる一級河川・鶴川



「むかわ竜」の全身骨格レプリカ



「むかわ学」発表の様子





斜里町の夕日

世界自然遺産「知床」で、自分の在り方や生き方を見つめ、成長した自分を実感できる教育をめざします。

地域全体で進める「知床しゃり」のブランドिंगの取組と連携し、観光教育に注力しており、知床の自然や生物多様性を学ぶ野外授業を含む「知床自然概論」、世界自然遺産エリアの原生林ガイドウォークや森林再生活動を体験する「知床自然体験学習」、旧石器時代からアイヌ時代にわたる遺跡・史跡めぐりを実施する「史跡発掘体験学習」、「全国高等学校観光選手権大会（観光甲子園）」を通して「知床しゃり」のPR活動を行う「観光ビジネス」などを授業として展開しています。地域の素晴らしさを知り、地域課題に理解を深め、情報発信できる人材を育成します。

斜里高校（斜里町）
世界自然遺産・知床半島のオホーツク海に面した港町。「観光教育」でまちのブランドिंगを学ぶ。



授業の様子



地域留学生が「チャシコツ岬上遺跡」（斜里町）を見学している様子



幌加内高等学校

「そば生産量日本一のまち」の農業科の高校で、生産、加工、流通・販売を通して、実践的な「六次産業化」を学ぶことができます。校内で生産した農産物を販売する「幌高商店会」、生徒が作った生そば、そば粉で作ったパウンドケーキ等の町内外での販売活動などを生徒主体で実施することで、経営力を育成します。

また、「そば生産量日本一のまち」にある高校として、全国で唯一、学校設定科目「そば」を設置しており、素人そば打ち段位を取得可能です。町内の道の駅にはそば店も出店しており、販売や出店は、地域とのつながりを深める場ともなっています。

幌加内高校（幌加内町）
そば生産量日本一のまちの実践的な「六次産業化教育」、生産から加工、流通・販売を一貫して学ぶ。

なお、人造湖である朱鞠内湖でのフィッシング、森体験のプログラム、北海道一の豪雪地帯であるほろたち山でのスキーなど、自然を満喫できるアウトドア体験も取り入れています。



地域留学生と地元生徒との対面式の様子



そば打ちの様子

